

第4号

発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長 川口 建

「赤心」がん
Dream

五代塾 Sinbun (新聞)

Godaijuku

NHK「英雄たちの選択 伊藤VS大隈」

官有物払い下げ先は

「部下の役人につくらせた商社」と放送

Dream 五代塾顧問

八木 孝昌

NHK「英雄たちの選択」の果敢

折しも本年八月十一日に放映されたNHK

「英雄たちの選択 伊藤VS大隈 日本」を

決めた政変の真相」は、「明治十四年の政変」

の分析の中で、開発長官黒田清隆が開拓使官

有物を「部下の役人につくらせた商社に払い

下げようとしていた」というナレーションを

入れた。これは番組スタッフが同政変の真相

を再検討し、払い下げ事件についての諸資料

に当たることによって、この間の研究成果が

動かしがたい事実であることを認定したもの

である。このことは同番組に武蔵野学院大学

教授久保田哲がコメントイターとして出演し、

また早稲田大学教授真辺将之への取材が紹介

されていることからして疑問の余地がない。

久保田哲は本年二月刊行の『明治十四年の

政変』において、官有物の払い下げ先は「安田・

折田が設立した北海社であった」と明記して

おり、真辺将之は二〇一八年刊の『明治史講義

「テーマ篇」第十講において、「開拓使官有

物払い下げ問題についても、誤った事実が広く

流布している」として、払い下げ先は五代の関

西貿易社ではなく、開拓使上級官吏が設立し

た「北海社」であると記述している。すなわち、

NHK同番組は官有物払い下げ問題について

従来説を採る歴史学者からは意見を徴さなか

ったのである。

開拓使官有物払い下げ事件の払い下げ先を

「五代の関西貿易社」としないで、「開拓使上

級官吏のつくる民間会社」としたのは、これが

放送史上の嚆矢であろう。

番組制作者の確信

同番組制作者には歴史学界の定説を退けて

も大丈夫であるという確信があったにちがひ

ない。番組は「払い下げ事件」について、少な

くとも二つの資料を入手していたであろう。

ひとつは上記の国立公文書館所蔵の政府資料

である。もうひとつは「朝野新

聞」明治十四年八月五日号であ

る。従来説が「五代への払い下

げ」の根拠としているのは、「東

京横浜毎日新聞」明治十四年七

月二十六日号であるが、それは

五代の関西貿易社が「開拓使と

約して北海道の物産を一手に引

き受け」と書きながら、他方で

「予輩は此報道の真偽如何は、

未だ知らざるなり」と補足する

頼りなさである。これに対して

十日後に発行された上記「朝野

新聞」は、「東京横浜毎日新聞」

の記事が誤報であることを指摘

し、政府が決定した官有物の払

い下げ先は開拓使上級官吏が結

成する民間会社であることを明

らかにした。記事には「こうある。

「開拓使中四五名の官吏は今回北海道政
略上の変革あらん事を察し自から其の官職を
辞して商軍(しようじん)商人と為り従来該使
が有する三十余ヶ所の製造所に就き其の最も
利益ある者を払い下げ以て北海道の商権を掌
握(中略)せん」と企望すと云ふ(画像参照)。

まことに奇怪なことに、従来説の歴史学界
は開拓使官有物払い下げ事件を論ずるに当た
って、誤報の「東京横浜毎日新聞」を引用して
よしとし、確報を伝えた「朝野新聞」は引用し
て来なかつた。その従来説側はNHKが日本
史教科書記述と異なるナレーションを流した
ことによって面目を失ったのであるから、本
来は同番組に異議申し立てをすべきである。
しかしそれはない、と見てよい。番組側には証
拠資料が揃っているのに対して、従来説側には
自説の正当性を裏づける証拠資料が何もし
ないからである。

朝野新聞

第二千三百六十四號
明治十四年八月五日
金曜日
朝野新聞社
發行所 吹田

キ大ニ論辯スル所アリ夫レ毎日新聞ノ説ハ稍ヤ確
實ナルガ如キモ少シク事實ノ主客ヲ失フガ如キノ
誤謬ナキニ非ズ何トナレバ毎日新聞ハ開拓使中ノ
會ヲ以テ此ノ締約ノ主ト爲レ開拓使中ノ或ル官吏
ヲ以テ客ト爲シタリト雖モ我儕ノ聞ク所ハ之レニ
反スレバナリ其ノ風説ニ據レバ開拓使中四五名ノ
官吏ハ今回北海道政略上ノ變革ヲ行フナリ自
カヲ其ノ官職ヲ辭シテ商買ト爲リ従来該使ガ有ス
ル三十餘ヶ所ノ製造場ニ就キ其ノ最も利益アル者
ヲ拂ヒ下ゲ以テ北海道ノ商權ヲ掌握シ其ノ威力ヲ
奮テ一舉ニ陶朱ノ富豪ヲ博取セント企望スト云フ

「朝野新聞」の題字と明治14年8月5日論説

会の活動にご関心を

五代を開学の祖とする大阪市立大学では、「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求めめる会」が結成され、「五代友厚に官有物払い下げ」という事実無根の教科書記述の修正を求めめる活動が開始されようとしている。「見直しを求めめる会」の発足予定日は十月一日である。同日を期して、「声明文」が同会から発表されることになっているが、詳細についてはなお検討中である。この活動には社会的な広がりが見られるので、本誌読者各位におかれても、この活動に関心を持っていただき、応援していただくことをお願いしたい。

第一国立銀行と五代友厚

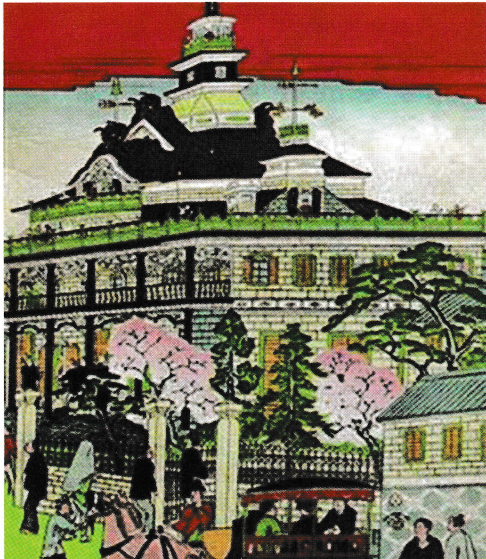
Dream 五代塾顧問 曾野豪夫

銀行設立前夜

五代友厚は明治二年に下野して大阪に金銀分析所を設立する一方、イギリス式のバンク設立の必要性を旧知の要路の政治家や官僚に説き、四年には小野バンクの設立申請を推進していた。三井組もバンクの申請を行ったが全て設立に至らなかった。五年、五代の斡旋もあって政府の指導により三井と小野グループは手を握ることとなり、まず三井小野組組合銀行(第一国立銀行設立までの準備銀行)が設立された。

大株主の三井一族と小野一族

明治六年六月、第一国立銀行が設立された。



第一国立銀行の建物
当初発注者は三井組であり明治5年竣工時は三井組ハウスと呼ばれたが、翌年9月に第一国立銀行設立後、銀行が買受けた建設：清水組 (Wikipediaより)

資本金二四四万円。筆頭株主は三井八郎右衛門(京都)と小野善助(同)の二人で、それぞれ七十万円宛出資し、持ち株比率はそれぞれ二十八%強だった。三井八郎右衛門と小野善助の両名が頭取に就任した。国立との名前を冠しているが、日本最初の株式会社である。

両頭取の上に経営の最高責任者として、大蔵大丞(たいじょう、大蔵省第四位の官職)を退任した渋沢栄一(三十三歳)が総監役(現在の会長)に就任した。天下一第一号といえる。渋沢は第十二位四万円の株主だった。当時の四万円の価値は、現在二万倍として四億円に相当する堂々たる個人株主である。

株主総数は七十一人で、上位十六人は別表の通りである。三井一族(三野村利左衛門、古河市兵衛を含む)の後ろ盾は大隈重信だった。

五代は小野組の名譽顧問・議長として第一国立銀行の創立を推進したが、創立株主にはなっていない。しかし、一〇年、七五〇株(七万五千円)の株式を保有し、十八年に亡くなる迄渋沢に次ぐ大株主だった。

明治6年 第一国立銀行創業時大株主	出資株数	出資額
1. 京都 三井八郎右衛門	7,000	70万円
2. 京都 小野善助	7,000	70万円
3. 阿波 西川 南(盛島の米相場で成功)	1,500	15万円
4. 京都 三井三郎助	1,000	10万円
5. 京都 小野助次郎	1,000	10万円
6. 東京 古河市兵衛(小野組と生糸取引)	1,000	10万円
7. 京都 三井源右衛門	800	8万円
8. 東京 三野村利左衛門	500	5万円
9. 京都 小野善右衛門	500	5万円
10. 大阪 小野善太郎	500	5万円
11. 京都 島田八郎左衛門(両替業・天満でも)	500	5万円
12. 東京 澁澤栄一	400	4万円
13. 横浜 添田欣一	200	2万円
14. 長崎 水見傳三郎	200	2万円
15. 長崎 水見寛二	150	1.5万円
16. 長崎 松田源五郎	150	1.5万円
17~71 その他 54名	2,000	20万円
合計	24,400	244万円
明治10~18年 五代友厚	750	7.5万円

七年小野組は政府の一方的な金融政策の急変により突然破綻した。第一国立銀行は小野組保有の株式一〇〇万円の減資を行って、窮地を脱した。そして小野組の撤退を機会に最大の出資者三井家の異論もあったが、渋沢は総監役を廃止し、単独の頭取に就任した。

江戸時代からの三井組両替店は七年「為換(かわし、かわせ)バンク三井組」と改称し、九年に初の私立銀行として私盟会社三井銀行を設立して業務を継承した。ここに第一国立銀行における渋沢の立場は絶対的なものとなった。

父と私と娘が勤務していた兼松株式会社の創業者兼松房治郎は六年、三井組銀行部大阪分店に就職し、十四年迄八年ハケ月間勤務していた。

その他の大株主

大阪堂島の米相場で成功し

た西川甫は、株主の中で唯一の阿波出身元士族で、五代と親しかった。

京都の古河市兵衛は維新後小野組で生糸の取引を行っていたので、やはり五代との繋りがあった。同じく京都の島田八郎左衛門は呉服商、両替商であり大阪天満にも拠点を持っていたことでもあり、五代と交流があったであろう。

第十四位の大株主、長崎の水見傳三郎(私の外曾祖父の兄)は唐物商として薩摩藩御用達だった。幕末の約十年間長崎に駐在した薩摩藩の五代は傳三郎と刎頸(ふんけい)の交わりを結んでいた。慶応二年、五代の意向もあり、傳三郎の末弟米吉郎(私の外曾祖父)が大坂に雄飛し、同四年初め「神戸事件」処理をきつかけに五代が大坂で明治政府に出仕するようになってからは、米吉郎は大阪永見商店(金融、清・朝鮮貿易)を経営しながら五代の股肱の臣(こうのしん)の一人として仕えた。

五代は幕末安政四年(一八五七)二十三歳で長崎海軍伝習所に学び、永見家の借家で貿易業を始めたT・グラバーとの交流も深め、二回上海に渡航して薩摩藩のために船舶などの購入をしている。そして日本と欧米の金銀の通貨交換率の不合理性について知識を深めていた。長崎永見商店が大名貸しも行っていたので旧幕時代の金融事情にも通じていた。

傳三郎は明治二年以来金融業を手掛けていたが、西南戦争で不穏な時期の明治十年末に第十八国立銀行を創業して初代頭取に就任した。同行設立に際しては渋沢の指導を受け、往復書簡が残っている。甥の水見寛二(米吉郎の甥)は十八歳の時に長崎から大阪の弘成館に務め、簿記、経済学などを学んで長崎に戻った。のち四代目頭取、衆議院議員を二期務めた。

第一国立銀行第十六位の大株主松田源五郎は、第十八国立銀行設立に際して松田庄三郎と永見庄三郎らを帯同上京し、親しく渋沢の応接と指導を受けた。庄三郎と庄三郎は、第一国立銀行で二ヶ月近く銀行簿記の講習を受けた。のち源五郎は二代目頭取となった。

大阪堂島「米」先物取引の終焉

大坂堂島の米(こめ)先物市場は一六〇〇年代前半に中之島の開拓を行った淀屋が始め、享保十五年(一七三〇)幕府に認可された。先物取引市場の認可は世界初である。堂島米市場の先物取引の一部が幕末期に混乱していたので、明治新政府は明治二年正米取引以外の先物売買を禁じた。そのため米商人数百名が活路を失い、諸物資の値段の元方(基準)が立たず大阪の商業活動に悪影響を及ぼした。そこで四年に米会所が復活したが、五代の奔走により九年新たに「米商会所」条例が公布され、堂島米商会所が設立された。五代は表にはでなかつた。

堂島米商会所創立肝煎(取締役)の一人だった三井元之助の信頼を得た兼松は、元之助の代人として勤め先の三井組銀行部から米商会所に派遣されて活躍した。兼松は十三年(かれ以前)に同所の肝煎に

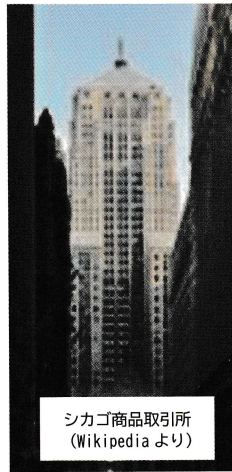


堂島米市の図 (浪花名所図会) 広重 (1858年没) (Wikipediaより)

れ以前)に同所の肝煎に
 (昔は専務とか常務とかの肩書はなかつた。)今年(二〇二一)八月農水省は、大阪堂島商品取引所が申請し

た米先物取引の恒久的な「本市場」への移行を不認可とした。ここに歴史ある堂島の米(こめ)先物取引市場は二九一年目にして消滅した。

世界一のシカゴ商品取引所(シカゴ・マーカントイル取引所)を訪れる人たちに「この取引所のルーツは日本の先物取引所であり、大阪が発祥の地である。私たちの市場は世界で最初に整備された日本の市場を参考に開設されました」と、解説のテープが流されている。同所取引マニュアルには「一七三〇年代に日本の大坂において世界最初の組織化された先物取引を含む商品取引所が存在していた」との記述がある。(英文必要な方は事務局まで)



シカゴ商品取引所 (Wikipediaより)

兼松は、米商会所における実直な仕事ぶりを五代に認められて十一年、大阪商法会議所の初代肝煎に就任した。私は、会議所設立当初に作成されたという膨大な調査報告書の多くは、兼松が作成したものと考えている。それは十年後兼松商店創業時のオーストラリア出張調査報告書を見て感じることである。

「青天を衝け」

私の父と叔父は一橋大学を卒業し、父は大正十一年神戸の兼松商店(明治二十二年創業)に、叔父は十五年第一銀行に就職した。渋沢の警咳(けいがい)に接する機会があったのかなかったのか。息子は第一勧銀(現みずほ銀行)に務め7年間近くシンガポール支店に勤務した。孫の行く末はまだ分からない。

NHK大河ドラマ「青天を衝け」で、第一国立銀行の設立についてどのように表現がされるのか、楽しみである。

参考書籍

- ・『第一銀行史』昭和三十三年版
- ・『十八銀行百三十年史』
- ・浜崎国男『長崎異人街誌』葦書房
- ・津川正幸『大阪堂島米商会所の研究』晃洋書房他
- ・島実蔵『大坂堂島米会所物語』時事通信社
- ・『Commodity Trading Manual, Chicago Board of Trade』
- ・『KG-100:兼松株式会社創業100周年記念誌』
- ・天野雅敏『戦前日豪貿易史の研究』勁草書房
- ・宮本又次『五代友厚伝』有斐閣
- ・八木孝昌『新・五代友厚伝』Pモ研究所

編集後記

今回寄稿いただいた紅茶のお話、大変興味を持ち読ませて頂きました。私の頭の中では一瞬過去の記憶が蘇ってきました。一つは、幼い頃に近所のお婆さん縁側でのんびりと茶の葉を揉んでいたのを思い出した。もちろん緑茶です。2つ目は、紅茶はコーヒーと同じように紅茶の樹があり、また輸入する飲み物で特別な人が飲む嗜好品であると思っていた若かりし時の思い出でした。単なる田舎者だったのでね。今では紅茶も緑茶も同じ茶樹から作られることも理解していますし、紅茶も一般的な飲み物になり日本文化の一つとして生活に馴染んでいるという変化を感じています。この紅茶作りには薩摩藩では150年以上も前から紅茶の研究をし、かつ、五代さんも大きく関与していたというお話にも驚きました。因みに、私は以前アジアの国々に仕事、また赴任した経験の中では、お茶の販売店やレストランでは、緑茶・ウーロン茶・紅茶が同じ土俵で出されることが多くありました。欧米の植民地等の時代を経た影響が大きかったのでしょうか。尚、聞きかじりですが、お茶の作り方の差は発酵工程の有無が大きな違いだそうで、簡単に言えば、不発酵茶=緑茶系、半発酵茶=ウーロン茶、発酵茶=紅茶となるそうです。毎日紅茶をいただき優雅でゆったりとした時間を過ごすのも良いかもしれません。(川口建)

会員募集中

詳細 Dream 五代塾 HP <https://www.dream-godai.com>
 連絡先 川口建 携帯:080-4497-5688
 Email:gogoken12345@gmail.com

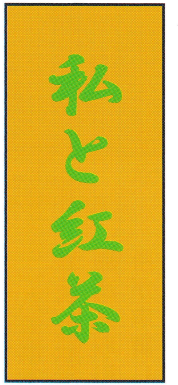
●~五代才助 いざ世界へ 富国のために!!(下)~
 は、紙面の都合で次号掲載を予定します

=お知らせ=

【セミナー開催予定】

- ① 2021年10月16日(土) 10:00~13:00
 大阪市内まち歩き(1) (土佐稲荷神社~大阪港・税関、居留地など木津川・安治川周辺を探索)
 - ② 2021年11月13日(土) 13:30~16:30
 五代友厚講談・旭堂南照~講談師真実を語る~
 1.「大阪の恩人」
 2.「薩摩藩英国留学」
 3.「開拓使官有物払い下げ事件」
 講演・八木孝昌氏 「五代の濡れ衣」
- ①②共、詳細はメール(会員)及びHPに掲載します

Topics



グレンヒルズ・カンパニー
代表取締役
田中 京子

1863年(文久3年)薩摩藩では「戦った相手英国に学ばなければ、日本は植民地化されるのではないか」の危機感が生まれ、五代友厚は藩に西欧視察と留学生派遣を願ひ出します。いわゆる『五代才助上申書』ですが、その中に渡航費捻出策として鹿児島茶を輸出して外貨を稼ぐという計画を提案しています。五代は上海渡航の経験があり、ヨーロッパ向けに紅茶が輸出されていることを彼は実際に見聞していたのです。当時の上申書の内容を薩摩海軍史より簡単に抜粋してみます。

「茶の儀は、製法はいたって簡単で、上品位が一斤600gにつき銀17匁、下品が14匁15匁と大まかに決めます。紅茶は緑茶より大変値段が良いので、その分だけ利益が増えます。そこで、郡奉公の中から人を選んで、二人ほどこれに専念するよう命じ、通常のお雇いより五人分ぐらい引き上げた賃金以って雇い、お金で人望や人気を集めます。そして、街道や村々の道の脇にも並木のように茶を植えさせれば、薩摩の茶は相応の質があるので、奄美の砂糖に次ぐ産物となると考えます。3年もすればものすごい利益になっているでしょう」

以下、紅茶の製造方法、これからの紅茶産業への向き合い方などと続きます。

明治維新を経て後、新政府は紅茶の輸出を促進しようと紅茶製造技術者を中国から招いたり、薩摩藩で洋学を教え、五代と共に留学生

計画を進めた石河確太郎を始め、技術者や農業研究者らをインドや中国に派遣したりしました。さらに、大久保利通は各地に紅茶伝習所をつくるなど、日本国内に産業としての紅茶の基礎を築きました。

そのような努力の結果、鹿児島では「べにほまれ」という素晴らしい茶樹の品種も確立されました。しかし1971年紅茶輸入自由化により明治時代の五代が携わった、藍の製造と同じく海外からの廉価な製品の輸入のため国内生産が壊滅状態となりました。

そんな中、私たち一家は鹿児島島の片田舎、知覧町(現南九州市)で診療所を営んでいました。娘の英国留学を機にイギリス文化に触れる機会が多くなり、ロンドンの大英博物館を訪れたときにはミュージアムグッズがあり、イーもいただける博物館に感動と憧れを感じました。



薩摩英国館ティーワールド (南九州市知覧町)

その夢の実現として、「こ知覧」に幕末当時に「大英帝国」と戦った薩摩藩、そして英国側から見た歴史資料館「薩摩英国館」をオープンさせることができました。「薩摩英国館」は小さなミュージアムながら英国紅茶を輸入し、またアンティークのティーカップはじめ紅茶関連用品を豊富に揃え、九州では一番たくさん紅茶が揃っていると評判にもなり、福岡辺りからも観光を兼ねて沢山のお客様において頂けるようになりました。

そして私自身も本格的に紅茶をサーブしたいとの思いで、日本紅茶協会のティーインストラクターの資格を取得しました。ちょう

ど時を同じくして枕崎の農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所の方から「べにほまれ」という新品種の茶樹を紹介され、それが自宅から車で10分も掛からないところで栽培されていたという感動的な出会いがありました。

日本紅茶協会では、美味しい紅茶はどのようなものか? という問いに対して次のように教えています。①茶液を口に含んだ時、優雅な香りがすること ②渋味が強く感じられなくても、爽快感があること ③味にコクがあること(深みのある濃い味わいがあること) ④カップに注がれた茶液の水色が明るく冴えがること ⑤喉越しがよいこと(口中がサッパリし飲みやすいこと) まさに私にとって「べにほまれ」はこの条件を満たしていました。



私はこれを機に、単に紅茶を輸入するだけでなく茶樹を育てることに興味を広がり、我が家の空き地に40本の植樹を振り出し、後に思い切つて一山を買い、家族総出で少しずつ茶畑を増やしていきました。現在は無農薬栽培の手摘みを信条にして「夢がうき」という紅茶ブランドを確立しました。

国内での【夢がうき】が好評になっていくとともに、本場英国での評価に興味をわき2007年にGreat Taste Award(GTA)に出品し金賞という英国での高い評価を得ました。それ以降も受賞し続け、2012年には三ツ星評価を受け紅茶の国英国「コンテスト」で「世界」などと報道されました。またその時の審査関係者でイギリスの紅茶研究家のジェーン・ペティグリ



茶図鑑』に、【夢がうき】が紹介されました。嬉しさと気恥ずかしさと共に、まだまだと思うところです。

ここの南九州市は現在、市町村単位では日本一の茶の栽培面積を有し、荒茶の生産量も日本一です。150年前、五代友厚らが街道や村々の道の脇にも並木のように茶を植えさせて、国産紅茶を産物にしようと提唱しました。「今こそ、枕崎にある紅茶の母樹から知覧の武家屋敷群に至る所々に茶樹を植え、芽が出たら老若男女でこそって茶摘みをしたい。そして英国のようなティールームコンテストを企画したり、ティーロードで盛り上がりたうらたうらたらどんなに素晴らしいことでしょう」と夢が膨らみます。



BUNROKU 文禄堤薩摩英国館 (守口市)

紅茶で有名なサー・トーマス・リプトンは「紅茶こそは大人の国、英国の生活文化であり、代表的嗜好品の一つであると共に、人間の身体と心に効く素晴らしい飲料である」と述べています。「この【夢がうき】と共に日本が大人の国であるといわれるようになれば」と思っております。皆様も一度、南九州市知覧に、おじゃつたもんせ(いらっしやいませ)!!